

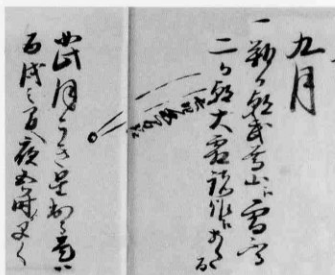
## 疫病の流行

左の史料は安政6年（1859）8月に高崎藩領の元総社村（現前橋市元総社町）で蔓延しはじめたコレラを地元医師上原元伯が記録したものです。コレラは、前年の安政5年（1858）江戸で大流行し、この記録にも秋に流行したとあります。この記録には元伯がどのようにこの疫病に対処したかが記されています。コレラは、当時暴瀉病とよばれ医師たちも対処に苦慮しました。この文書中には、伝染の凄まじさが記されています。元伯は、漢方の書物のほかさまざまな医学書を読み、最新の医学書であったドイツ人モルスの著『医学韻符』からコレラという病気であることに気が付きます。元伯は、解熱剤や温浴法によって多くの命を救ったのでした。元伯はこのコレラ発生の理由として寛理家（物理学者）のいう彗星接近説を紹介しています。ちょうどこのころドナッチ彗星が接近していたのです。

右の史料は、安政5年（1858）江戸市中でコレラが流行していた最中に現れた彗星を記した日記です。この記録は、利根郡下久屋村（現沼田市下久屋）の倉品勘右衛門（13代）の日記の安政5年の部分に記されています。この彗星はヨーロッパではドナッチ彗星として知られており、近日点通過はグレゴリオ暦で1859年9月30日でした。この部分では、午後7時半頃に北西（西戌）に向かって出現している様子を描いています。勘右衛門の記録では、8月27日午後7時半頃から北西に出現し、翌日明け方には北東方向に向きを変えたと記されています。さらに9月18日頃から見えなくなったとしています。

同じ上州の地で、こうした2つの記録がとられていたことは興味深いこといえるでしょう。

（参考資料）『群馬県史』通史編6 371～382頁



九月

一期日朝武尊山へ雪ふる

二日朝大霜、諸作へあたると

(彗星圖) 長さ四、五間位

かくの如きほろつき星出る、これは

西戌の間へ夜五ツ時より早く

(以下略)

安政己未の中秋十二日の頃より暴瀉病余が郷に流行して驚るもの算うるに暇あらず、去年戊午の秋も流行すると雖も、今年の數去年に比すれば百倍（倍）せり、その初め北より起りて南に及び終に城市村落一般に蔓延するに至る、その勢い風の廻転して砂を巻き、樹を倒して進むが如く、その進むところの勢い、必ず、暴瀉（虐）（虐）、人を死すことの速くなる。一・二時を過ぎず或いは半時して驚るものあり（以下略）

四 \*安政己未の中秋（安政六年の八月）／暴瀉病（激し下痢をする病気、コレラのこと）／余が郷（上原元伯の住む高崎藩領元総社村）／一・二時、半時（秋の一時は約二時）

安政己未ノ中秋十二日ノ頃ヨリ暴瀉病余ガ郷ニ流行シテ驚ル、モノ算ルニ暇アらず去年戊午ノ秋ニ流行スルト雖モ今年ノ數去年ニ比スレハ百倍セリ其初メ北ヨリ起テ南ニ及ビ終ニ城市村落一般ニ蔓延スルニ至ル其勢ハ颯風ノ廻轉シテ砂ヲ巻樹ヲ倒シテ進ムガ如ク其進ムトコロノ勢必ス暴瀉劇人ヲ死スノ速カナルニ二時ヲ過ス或ハ半時シテ驚ル、モノアリ其症發スルノ初メ腹痛セズ苦ム